

2019年度「海外学校教育実地研究」（第1回目）報告

— オランダ視察 2019年9月9日（月）～15日（日） —

荒巻 恵子・町支 大祐・小松 千草・小宮山香織・安藤 拓也・
高田 裕一・宇佐美 健・友部 智予・三澤 貴博・小倉 信・南部 有枝

帝京大学大学院教職研究科

2019 年度・海外学校教育実地研究〈オランダ〉

荒巻 恵子・町支 大祐

帝京大学大学院教職研究科

1. これまでの経緯

4 回目を迎えた海外学校教育実地研究の課題は、前回から引き継いだ訪問日程の検討だった。これまで、3 回にわたるイギリス訪問は、9 月期月上旬から約 1 週間の訪問日程であったが、例年大学の秋学期開始の学事日程と重なることが課題にあった。さらに、この時期はイギリスの学校教育における新年度の開始時期に当たるため、訪問先との調整に難航を極めた。そのため 2018 年度は、前半オランダ、後半イギリスの 2 か国訪問とした。こうした経緯を受け、今後の訪問日程と訪問先を検討するため、2019 年度では、9 月期に高度化実践コース 2 年次の学生を対象としたオランダ訪問、2 月期に高度化実践コース 1 年次の学生を対象としたイギリス訪問という 2 箇所の訪問先での海外学校教育実地研究を実施し、訪問日程及び訪問先の検討を行うこととなった。スクール・リーダーコースの学生には、希望制として選択させた。オランダは、本科目の実施試行期であった 2015 年度に試験的に実施した訪問先で、イギリスよりも 1 週間から 10 日ほど、新年度の開始時期が早くはじまるため、日程調整がしやすかった。そこで、2019 年度 9 月期はオランダを訪問先と決め、実施することとなった。

本稿は 9 月期のオランダ訪問について報告するものである。参加者は、高度化実践コース 4 名、スクール・リーダーコース 5 名、引率教員 2 名の 11 名が参加し、9 月 9 日（月）～15 日（日）の 6 泊 7 日で実施した（表 1）。

2. 緊急事態への対応

2019 年度 9 月期の実施では、渡航前夜から渡航日当日の早朝、台風 15 号が関東地方に上陸した。出発日は 4 時間遅れの出発となり、さらに 11 名の

学生のうち 3 名は、台風の影響により成田到着が困難となり、1 日遅れの出発となるというアクシデントに見舞われた。今回のアクシデントにより、緊急時の的確な判断、行動（関係各所への連絡、対応）等、実施に伴う新たな課題が表出した。特に、学生保険や団体チケット購入の見直しが課題となり、2 月期実施については見直し、検討が行われた。

2019 年度 オランダ訪問の旅程表（表 1）

月日	予定
9・9 月	出国→アムステルダムスキポール空港着
9・10 火	OBS Dalton Waterland 訪問 Maria Montessori School 訪問
9・11 水	Jenaplanschool De Hasselbraam 訪問 De Wellant college Oegsteest 訪問
9・12 木	De Zonnebloemschool 訪問 アムステルダム市内施設 訪問
9・13 金	SO Het Waterland 訪問 ICLON 訪問およびワークショップ
9・14 土	国立博物館等 訪問 アムステルダムスキポール空港発
9・15 日	帰国

3. 2019 年度のオランダ訪問の実施状況

(1) 訪問校のアレンジ

2019 年度のオランダ訪問については、2018 年度同様、オランダ在住のユリアナ コグレ（Iuliana Kogure）さんにコーディネートおよび通訳を依頼した。訪問先は、日本では“オルタナティブ教育”と称される、イエナプラン教育、モンテッソーリ教育、ダルトンプラン教育など、多様な教育理念をもつ学校を中心に選定した。

訪問した学校は、① OBS Dalton Waterland、② Maria Montessori School、③ Jenaplanschool De

Hasselbraam、④ De Wellant College Oegsteest、⑤ De Zonnebloem School、⑥ SO Het Waterland、⑦ ICLON: Leiden University Graduate School of Teaching で、小学校4校、農業学校1校、特別支援学校1校、大学1校の計7校である。

学校種だけでなく、カリキュラムや理念の違いもあり、オランダの自由で多様な教育の特色を理解するために、最適な訪問先となった。

(2) 事前学習

第1回の授業5月20日に、訪問日程と訪問先を示し、調査内容を概観し、授業計画の全体像を提示するとともに、調査の意義と方法について説明を行った。

第2回の授業7月30日には、オランダの教育制度及び教育改革の動向について学ぶ機会を設けた。それらについての基本的な知識をふまえ、各訪問校が掲げる教育理念やカリキュラムの特徴について、web等を通して調べる学習を行った。

第3回の授業9月6日の事前学習では、我が国と海外の学校教育を比較する比較教育研究の意義、その具体的な研究方法や捉え方等について説明を行った。教員側から伝えたポイントは、以下の通りである。

海外の教育をみる際には、もともと自分が持っている価値観でその良し悪しをはかたり、自分の環境で実施可能かどうかを簡単に判断したりしがちである。それも足がかりとしては必要であるが、むしろそれより一步深い点、つまり、海外の教育における理念や哲学を、自分の目で見えた事実から解釈し、理解していくことが重要である。例えば、モンテッソーリ教育について事前に学んでいくことは重要であるが、一方で、その場の中に入ればその色眼鏡を捨て、そこで行われていること、そして、そこにいる児童生徒の事実から捉えていくことが必要である。

(3) 実地研究期間中

今回のオランダ訪問の旅程は表1の通りである。各学校では、授業見学および授業参加のうえで、

校長や中核教員とのディスカッションを行った。また、児童生徒との交流なども行った。各学校の訪問の様子は後述する報告を参照されたい。

訪問期間中、ユリアナさんには、学校との連絡や通訳にとどまらず、過去の訪問校との比較や、オランダの市民から見た各種学校の見え方など、さまざまな視点から学生に資するアドバイスをいただいた。

また、訪問期間中には宿泊先のホテル内でリフレクションの時間を設けた。それぞれの学生が見とった事実、児童生徒について感じたことについて対話し、そこをきっかけに、互いに問いあい、悩みあいながら深めていった。

(4) 訪問都市および社会教育施設の視察

学校の所在地は、デン・ハーグ、ライデン、エメロルトなど多様な都市にあるが、それぞれの都市環境は異なる。こうした違いも肌で感じながら訪問を行った。また、アムステルダム市内の社会教育施設訪問（国立美術館等）の際には、ユリアナさんのご家族であるイクオ コグレ（Ikuo Kogure）氏から施設案内、施設解説の御協力頂いた。街中の各所で、オランダにおいて、自己決定や、各自の価値観が重視されている姿を目にすることができた。こうしたオランダの社会全体に通じる理念は、学校教育にも貫かれ、また逆に言えば、そうした学校教育を通じて育った市民が、自由な社会を形成していくというつながりを感じる、貴重な機会となった。

(5) 事後学習および報告会

事後学習会では、次の2点を行った。1つは、各自が報告会に向けて、担当の学校についての訪問調査の結果をまとめたことである。もう1つは、報告会の進め方について自ら検討したことである。

訪問時、学校管理職や児童生徒たちとの「対話」が、今回の実地研究での学びに、重要な意義をもたらしたことから、各学校についての調査結果をまとめることにとどまらず、報告会でも「対話」を行いたいとの学生たちの意図から企画を行った。また、あわせて視察の様子について動画の作成および編集

を行った。

第15回の授業9月25日は報告会を行った。発表数が多く、結果的には深い「対話」が十分に行われたとは必ずしも言えない状態であった。また、調査成果の共有の方法、および報告会を通じた研究科全体での学びのあり方については、今後も改善を求めて継続的に検討する必要があるだろう。

4. リフレクションの意義

今回の訪問において、筆者から見て学生の学びが最も充実していたのは、学校視察中とその晩のリフレクションである。視察中、学生達は日本と異なるあり方に大いに刺激を受け、揺さぶられていた。そして、その揺さぶりをきっかけに、学びを深く深く掘り下げていったのがリフレクションの時間である。

その時間は、何かを計画的に進めたのではないが、筆者なりに振り返れば、次のような事が起きていたと言えるだろう。まずは、実践を自分の現場で活用できるかをそれぞれが考えた。これは、海外に限らず自らの現場とは異なる実践に出会った時、常に起きることである。そのうえで、もう一步掘り下げ、実践内容やそこにいる人から、その場を創りあげている価値観を感じとり、その価値観を土台として自分の現場で実践しようとしたらどうなるか、を考えた。これらの一連の思考の中で、異質なものを見る時に、自分の視点が強く自分の経験に縛られていることを体験した。加えて、この縛りを乗り越えるために、その現場で感じた事実（例、フィールドノート）に立ち返ったり、他者との感じ方の違いについて考えることを通じて、何度も「本当か」「何故か」と問い続けた。これらの取り組みの中で、それぞれが、徐々に自分の見方や価値観があらわになってくる瞬間を体験した。こうした対話のあり方や、問い続ける姿勢、そして、そこから見えてきた「自分」については、各学生の今後のキャリアや研究等に必ずやつながるはずである。

もちろん、こうした対話は日本国内でも目指すべきものであるし、場合によっては可能かもしれない。しかし、対話に十分な時間と集中力を注げるだけの

環境は、なかなか用意されにくい。時間がない中では、簡単に答えをだしたくなってしまう。また、こうした対話が始まったきっかけは、異質なものに触れ非日常の場にあったことである。これまでの経験や現場の状況を離れ、1人の人として素の人間になることができたからではないか。そこに、学びを深めるための十分な対話の時間をとれたことが功を奏したと考えられる。こうした学びを経験できたことが本視察の最大の成果であろうと筆者は考える。

（文責 町支）

5. 対話的学びの本質

実地研究でオランダを訪れたのは、2015年9月以来4年ぶりであった。当時は現職8名とのグループでエクセレントスクール（教育実践優秀校）を中心に訪問した。2015年9月、シリア難民に揺れた欧州で、難民受け入れに積極的なオランダが目玉された。歴史的にも移民国家として成立してきたオランダの寛容な国民性を象徴した出来事だった。あれから4年が経ち、オランダが直面するのは教育機会の不平等さとイギリス EU 離脱に絡み深刻化させる欧州全体の不均衡さである。教育の自由をうたってきたオランダにとって、不平等不均衡こそが教育の自由を妨げる危機的因子なのである。そして、移民国家オランダがもう一つ大事にしてきたことが「Dialogic Teaching（対話的教育）」である。移民の多い国だからこそ、教師はオランダ語を教えるとき、子どもたちの母語の背景にある文化や社会を理解して教える。そこでは、一人ひとりの子どもたちに「自分」とは何かを問うことから始めるという。私は「オランダ人」である、「アジア人」である、…子どもたちが「自分」を見つめていくとき、他者との違いを見つめ、さらに「自分」を問う「対話」は深く深く、自己の内面を揺さぶることになるという。今回の実地研究を通じて学生たちは、自己の内面にあるこれまでの経験や価値観を揺さぶりながらオランダ人のことばに耳を傾けていた。言語を超えて、「対話」の本質を考える機会をもらった。

参加学生、一人ひとりのオランダ訪問における学びについては、以降の報告をご覧いただきたい。

（文責 荒巻）

【OBS Dalton Waterland, Den Haag】

ダルトンプランの公立小学校

小松 千草・小宮山 香織(帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

1. 学校基本情報

学校名 : OBS Dalton Waterland, Den Haag

電子メール : directie@obswaterland.nl

所在地 : Eendenplein 1, 2492 NZ Den Haag

授業時間 : 月火木金 8:30 ~ 15:15

水 8:30 ~ 12:15

子供の年齢 : 4歳 ~ 12歳(4歳の誕生日に入学)

学校の特徴 : ダルトンプランの公教育の学校。子どもたちの違いを認め、違いを教育の出発点とし、教育プログラムを形成する。学習レベル、学習ペース、興味での差別化を重視し、標準ではなく、オーダーメイドの教育を行う。

2. ダルトンプランについて

ダルトンプランは、今からおよそ100年前に、米国の教育家ヘレン・パーカストが、当時多くの学校で行われていた詰め込み型の教育に対する問題意識から提唱した、学習者中心の教育メソッド。マリア・モンテッソーリの自発性、自主性を重んじる着想(モンテッソーリ教育)やジョン・デューイの問題解決学習などの長所を取り入れて練られたものである。クラスの人数が多くとも、児童一人一人の能力を伸ばす目的で考案された。中心になるのは自由と協同という考えである。

3. 訪問調査の記録

(1) ダルトンタイム・プランニング

児童一人一人が、自分の力ややりたいことに合わせて計画を立てて学習を進める『ダルトンタイム』がある。1日15分程度から、学年の実態に合わせて時間を決めて行われていた。

4歳~6歳は、先生が1日の流れをホワイトボードに貼ってスケジュールを示し、7歳~9歳は、クラスのホワイトボードに、全員が自分の学習プランを考え示していた。10歳~12歳は、各自が自分のプランニングシートをもっており、それをもとに学

習を進めていた。

見通しをもつこと、自分の能力や特性に合わせて計画を立てることなどのプランニングの力をつけることを大切にしている。

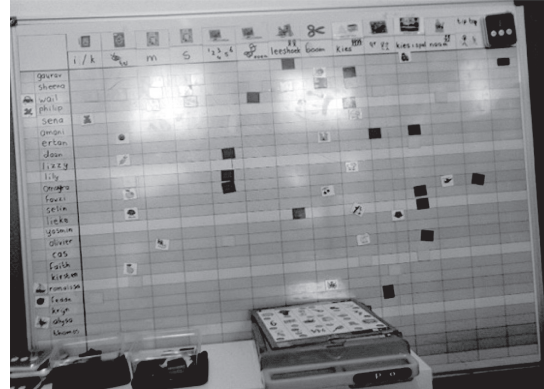


図 ホワイトボード

(2) 実際の授業

①オランダ語の授業

年齢 : 11歳 ~ 12歳(グループ8)

人数 : 約25人

机の配置 : 4人グループ

電子黒板に映し出された資料について、おかしいところがないかを考えるよう投げかけていた。

電子黒板の両サイドのホワイトボードに当日のプランと目標が書かれていた。

教室ではなく、廊下に置いてある椅子とテーブルで学習する子たちもいた。彼らは、スマイルの絵がついたカードを持っていて、きちんと学習していないとそのカードを取り上げられてしまい、教室へ入らないとならないというルールがあるということだった。

②算数の授業

年齢 : 7 ~ 8歳

内容 : ゲームをしながら数字を学ぶ授業

- ・2つのサイコロを投げて、出た目の数を足して、ワークシートの数字に色を塗る。
- ・2人組でトランプを出して、大きい数のカードを

出した人がトランプをもらえる。

- ・ 数字が書かれたスポンジを数の順番に友達と並べ換える。
- ・ パソコンを使って数字のゲームを行う。
- ・ てんとう虫のロボットを使って、シートに示された数を、順番通りに動くようプログラミングする。上に示したようなグループに分かれ、自分がやりたいことを選んで取り組んでいるようだった。

③体育の授業

年齢：11歳～12歳

体育の専任の先生が週に4日勤務し教えていた。

自分の場所が決まっているようで、体育館に入るとすぐに自分の場所に小さなマットのようなものを敷いて待っていた。授業は音楽に合わせたダンスから始まった。

体育の授業の後は、シャワーを浴びるとのことで、体育館の隣にシャワー室が設けられていた。

④プログラミング

小さな時から簡単にプログラミングができるようなおもちゃが用意されており、遊びや勉強の中で使われていた。パソコンも各部屋に1～2台は用意されていた。オランダもICT教育が推進されていた。

(3) 環境

●リーディングコーナー

子供たちの提案から作られた場所。子供たち自身によって、以下のことが行われた。

- ①計画を立てさせる。
- ②いくら必要か考えさせる。
- ③ルールを考えさせる。
- ④ルールを他のクラスの子供たちに説明に行く。

●4～5歳の教室

小学校というより、日本の幼稚園に近い様子。砂場が室内にあるのが特徴的。様々な遊具は、感覚を育てることを大切に設置されている。

①様々な遊具

砂、ブロック、クレヨン、ペインティングボード、積み木等（水道も教室内にある）

②サークル状の椅子

長椅子がサークル状に置かれていて、お互いの顔を見ながら話せるようになっている。

●特徴的な環境設定

- ・ 廊下にソファとクッション、テーブル、椅子、遊具バドがある。
- ・ 教室にテントがあり、その中にクッションが置かれていて本を読んだり遊んだりできる。クールダウンにも良いかもしれない。
- ・ 廊下の壁にQRコードがかかれたポスターが貼られており、タブレットで読み取ると問題が出てくる。子どもたちはタブレットを持って回ると様々な問題を解くことができる。
- ・ 先生のためのコーヒーマシンが教室前の廊下にある。校長先生によると、先生たちの元気の源であり、とても大切なものであるということだった。

(4) 課題

この学校では急な病欠や退職があったようで、教員不足が課題となっていた。募集をしてもなかなか見つからず、資格や経験がない人でも採用せざるを得ないといった厳しい状況もあるようだった。教員の社会的立場があまり高くないといったことも原因としてあるようだった。

4. まとめ

この学校では、子供が計画を立てること、選択できることを大切にしており、「自律」ということに重点を置いていた。

その中で教師の役割は、見守ること、サポートしながら子供たちを導くこと、主体性を高められるような授業をつくっていくこと等であった。

しかし、子供たちに任せることにより、学習状況には差があり、学力の差もひらいてしまうことは否めないとも話していた。

日本では、学力をある一定レベルにまでは到達させようと、様々な方法を使ってどうにか引き上げようとする。日本の教師が持っている使命感のようなものなのかもしれない。

今回この学校を訪問し、子供が計画を立てることや選択できることは、日本でも取り入れたい視点である。ただし、主体性を大切にすることによって高められる力と、教師の関与によって高められる力、どちらも必要だと感じた。

【Mria Montessori School】

モンテッソーリ教育を根幹とした初等教育学校

友部 智予 (帝京大学大学院教職研究科 高度実践化コース)

1 学校基本情報

学校名: Maria Montessori School

所在地: Crossgate Moor, Durham, DH1 4SU

学校の特色: モンテッソーリ教育の「自己教育力」と、それを発展させる「整備された環境」が根幹にある。以前は伝統的なモンテッソーリ教育を行っていたが、学力低下を受け、2014年～2019年は一斉授業の形態を取っていた。学力向上に伴い、2019年からモンテッソーリ教育と様々な教育論を融合した、現代的なモンテッソーリ教育への移行を計画中である。

生徒数: 約550名 (4～12歳)

2 訪問調査の記録

(1) 学校の様子

オランダでは5歳から義務教育制が適用されるが、当校では義務教育前の4歳から入学を受け入れ、子供の自己教育力と、それを発展させるための環境整備を重視した教育が行われている。

モンテッソーリ教育を根幹としているが、2014年までのオランダの学力調査(12歳対象)の結果が伴わなかったことから、一時期、モンテッソーリ教育から教師が前に立つ一斉授業の形態へと変化した。その結果学力が向上したため、2019年より、モンテッソーリ教育と様々な教育方法を取り入れ融合させた、現代的なモンテッソーリ教育への移行を計画中である。この新しい学校計画の中で「自分を成長させ、一緒に学び、安全な環境で世界を発見する」という教育ビジョンが示されている。「自己啓発」では子供たちに自立感、自尊心、自分の個性に対する自信を与えることを目的とし、個人の発達と能力に見合った支援の重要性を示している。「一緒に学ぶ」ではチーム学校としての在り方、「世界を発見する」では教科横断的な学びの採用を示している。また「安全な環境」では、子供たちが安全であると感じているときのみ学校に来て学ぶことができ

るとしている。これは物理的な安全面は然ることながら、精神的な安全面においても適用されるとしている。現在、子供たちにとってここで学ぶということは「私(子供自身)が自分でやることを援助してもらう」ことを指している。

その他の主な特徴として、「IPC (International primary curriculum)」と「ピースフルスクール」の2点が挙げられる。

「IPC (International primary curriculum)」とは1980年代にイギリスのナショナルカリキュラムをベースに開発されたカリキュラムであり、現在、世界の約90カ国で採用されている。このカリキュラムでは、定められた一つのテーマについて、理科、地理、歴史、技術、美術などの複数の観点から追究しながら学習をしていく。この学校では2017年からIPCを取り入れることで、子供が自ら調べ追究する学習の実現を行っている。

「ピースフルスクール」は2019年から取り入れられた方針である。ここでは子供たちが自ら学校生活のルールを定め、子供同士で呼びかけを行うことでルールを遵守していく取り組みを行っている。

上記のように、当校では子供の自主性に基づいた教育が実施されている。

(2) 施設の様子

Den Haagの住宅街の中心に位置する。校門を潜ると3つの棟がそびえ立つが、そのうちMaria Montessori Schoolの建物は1棟のみであり、他2棟は老人介護施設と別の教育施設となっている。3棟に囲まれるように校庭があり、複数の遊具で子供たちが遊ぶ様子が見られた。

建物は3階建であり、1階には4歳、5歳の教室が並び、2階、3階に上がるにつれて、高学年の教室が並ぶ。各階、教室のみならず、廊下にも子供が手を動かしながら学ぶことのできる教材が並んでいる。室内でありながら各階の廊下に砂場が設置され

ており、生徒は休み時間だけではなく、授業時にも砂場を利用して学んでいた。高学年の壁には算数用の教材が設置されていたが、2014年以降の学校方針の変化のため、使われている様子は見られなかった。

職員室は2階に位置する。ただし教員一人一人のデスクは無く、代わりに部屋の中央に大きな円卓が置かれている。また職員室もその他学校施設と同様、色鮮やかな配色が施されている。このような形にすることで、教員間でのコミュニケーションが気軽になり、教員同士の連携が強まる効果を目的としている。

(3) 授業観察の記録

私たちは校内全体を見学した後、一度職員室で質疑応答を行ってから、2人1組になり、各クラスに分かれ見学を行った。私が見学したクラスは4歳の義務教育前のクラスであった。その時間の活動内容は手を使った遊びの時間であった。決められた活動をするのではなく、子供たちはそれぞれキネティックサンドや積み木など、自分がやりたい手遊びを行っていた。また活動場所は教室内に留まらず、廊下にて砂あそびや三輪車に乗る子供もいた。このように活動内容、活動場所を定めないのは全学年共通である。その後チャイムが鳴り、担任の「終わり。」という合図のもと、子供たちは一斉に片付けを始めた。中には掃除道具を持ち出し、床に落ちた砂を掃いている子供の姿も見られた。その間教師は子供たちの活動を見てはいるが、作業の指示は一切行わなかった。しかし、4歳の子供たちは自主的に掃除を行い、掃除に参加しない生徒に対して、他の生徒が言葉がけをすることで行動を促していた。

次は、帰宅の時間まで映像を見ながらダンスを踊る時間であった。大半の子供たちが一緒にダンスを踊っていたが、中には何もせず座っている生徒もいた。しかし教員は声がけすることなく、子供の自主性に任せている様子が見られた。

見学できたのは以上の2つの活動のみであった。その時間の中で教員が生徒に対して行動を指示する様子は見られなかった。しかし、子供たちは自ら掃

除をし、怠けている子供に対して言葉がけを行っていた。



図 算数教材

3 オランダ教育の課題と対策

今回訪問した Maria Montessori School は、元々はモンテッソーリ教育を行っていたが、一斉授業の形態を経て、現在は再びモンテッソーリ教育へと移行している期間であった。そのため、特有の教材が使用されていなかったり、モンテッソーリ教育の特徴が顕著に見られなかったりした。しかし IPC やピースフルスクールを始め、全ての活動において、教師から一方的に生徒に対して指示を出すのではなく、子供の自主性を尊重した指導が行われ、モンテッソーリ教育の「自立を目指す」という理念のもと教育が行われている様子が見られた。

また当校では、2014年に学習成果が達成できず、教育方針が変わるという大きな課題があった。しかし、教師、職員、生徒、保護者間で絶えず話し合いが行われ、全員が納得をしながら教育を行ってきた。特に保護者の中には理事会があり、学校における全ての決定について意見を聞いている。職員室の形態を含めて考えると、当校では学校に関わる全ての人とのコミュニケーションを重視し、チームとして連携を強めながら教育を行っていることが分かった。現在、日本ではチーム学校としての連携が求められている。当校の理念と方法は、これからの日本の教育のあるべき姿のように思える。

【Jenaplanschool De Hasselbraam】

イエナプラン教育の小学校

安藤 拓也 (帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

1 学校基本情報

学校名: Jenaplanschool De Hasselbraam

所在地: Luxe aluminium terrasoverkappingen

Iepstraat 5 4871 VJ Etten-Leur

校長名: Jacqueline Aarts

生徒数: 1クラス 26名 8クラス

2 イエナプラン教育

イエナプランシステムは、イエナから来たピーター・ピーターセンによって考案された。このシステムは、スース・フレンデンタール・ルターによってオランダに導入された。イエナプラン教育の典型的なテーマは、協力と作業である。最も顕著な特徴は、異年齢の児童が1つの学級グループに混在していることである。グループの中でのやるべき仕事やそれぞれの役割と組み合わせて、生徒の自立を目指している。サークル、お祝い、仕事や遊びを重要視しており様々なイベントがある。現在220以上の小学校と10の中等学校がオランダイエナプラン協会に登録されている。

3 ハッセルブラハム

ハッセルブラハムは「自分自身の能力を開発すると共に仲間がお互いに学びあえる場所である」という考えを学校の基本方針としている。

原則として、両親、生徒、教師の相互作用を重要視している。チームが成立することで全員がインスピレーションと満足感を得ることができると考えている。

特別な配慮を必要とする子どもたちについては、委員会 (CVI) が「バックパック」を受けるかを決定する。「バックパック」が障害児に特別なケアを依頼できる時間とお金の保障となり通常の小学校に通うことを可能にする。通学決定後は学校での子どもたちの可能性について面談を行う。話し合う内容としては、子どもにとって必要な援助、保護者の期

待とそれらを満たすための学校の可能性である。

4 訪問調査の記録

(1) 学校の様子

閑静な住宅街の中にある落ち着いた雰囲気の学校であった。

校舎は1階建てで3つの入り口がある。その入り口付近にはいくつかの遊具があり休み時間などに子供たちが使えるようになっていた。中央の入り口から奥に行くとエントランスでそこには小さめのステージがある。ステージで行事ごとに出し物をするようになっていて。ダンスや歌や劇などイエナプランで重要視しているイベントが行える。校舎内の壁は白を基調とした色遣いとなっており、教室や廊下の床は黄緑色、職員の使う部屋は紫色となっていて全体的に明るい感じであった。廊下の一部が本棚となっていた。壁面には掲示物や月ごとの行事の表示ができるようになっていて日本と類似していると感じられた。どの教室にも大型のディスプレイとホワイトボードが設置されていた。教室内の掲示物はそれぞれで違っていたが、日本で言う低学年の教室には椅子の正しい座り方やノートの書き方などが絵や箇条書きで示されており、これにも日本との類似性を感じられた。

(2) 学校のシステムと活動

○システム

4歳から6歳までのグループが2つ、7歳から9歳までのグループが3つ、10歳から12歳までのグループが3つの計8つのグループがある。1学年を基本3人の教師で担当する。それぞれのグループは物語に出てくるキャラクターの名前がついている。すべてのグループが異年齢の集団で構成されており、行う教科、学習によってグループのメンバーや関わる教員が変化する。異年齢によるグループ作りは、男女、子供の特性、教師との関係などを考慮

して行っている。どのグループでもチェックインとチェックアウトを大切にしている。これは日本における朝の会と帰りの会に似ているものであり、その日の気分や体調や満足度を確認する機会、生徒理解に役立つものと考えられている。内容は発達段階に応じて若干の変化があり、年齢の低いグループの内容にはハグ、握手、ダンスなどを生徒自身が選択できるようなことも場面も含まれていた。

普段は近い年齢でのグループ活動が中心だが、離れた年齢による交流も行われている。日本でも高学年による低学年への読み聞かせを行っている学校があるが、ここでも高学年グループが低学年グループへの読み聞かせをする機会を設けていた。

学習においては、EDI (effective direct instruction…学生が自分自身で批判的に考えることを奨励し、学習者自身で意思決定をし、真の好奇心を促進し、学習方法の確立と自立と粘り強さを養う) を奨励しており、授業では、子供に何をするのかをしっかりと伝えることを意識している。授業は、導入、展開、個別のケア、机間指導、まとめという5ステップを基本展開としている。

○特別な支援について

ハッセルブラハム校では、すべての生徒にその生徒にとって必要である特別な支援を行えるようにしている。そのためには、子供と教師、子供同士、教師と親といった関係が重要であり、特に教師と親との関係は日頃からの関係づくりを重要視している。普段の何気ないことを細目に伝えていくことで大きな問題が起きたときにもその内容をしっかりと伝えられる人間関係の基盤が作られると考えている。問題を起こしやすい子供については観察、分析をしっかりと行うことが大切で、頻繁に活動グループを変え、様々なグループの中で多くの教師が関わるようにしている。観察することでアイデアが生まれる。どうしてもアイデアが出ない場合は学年の教員間で相談し、それでも解決策がでない場合は関係機関と相談をする。何とかして学校での成長を促せるようにしている。子供たちのゴールを設定して、頻繁に確認する。それにより問題のある子供に素早く支援が行えるようにしている。

○教師教育について

ハッセルブラハム校では、それぞれの教師の資質能力向上に向けて授業参観、校長との面談、研修を行っている。授業参観ではお互いの授業について感想やアドバイスを伝えるようにしている。校長との面談は3か月に1回行うようにしており、そこで、その教師にとっての3か月でできるゴールを設定し、過程と結果をフィードバックするようにしている。研修ではスクラムというホワイトボードを使った研修を行うようにしており、ミーティングの効果をあげるように努めている。研修内で飽きることのないように行うことも工夫している。

○授業風景と教材教具

参観者4人に対して3人の生徒がついて説明を行ってくれた。すべての受け答えを英語で行い丁寧に学校の様子を伝えてくれた。子供たちの机の中には道具箱があり、それを教室移動のたびに持ち運んでいた。下校時にはそれを机から出して片付けるようにする。各教室の一角には個別や小集団での学習が行い易くなるような教材が整えられていた。教師用の机も教室内にあり、教師用の文房具もきれいに整頓されていた。タブレットも1クラス分が常に充電されていた。全体指導用の掲示物が多く見られた。

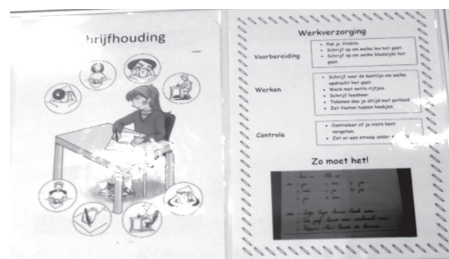


図 掲示物

5 まとめ

イエナプランの学校ということで日本ではこれまで見ることがなかったすべての活動を異年齢で行う学習方法についてグループ編成や活動方法など学ぶことができた。一方、日本との共通点が多いことにも驚いた。配慮を要する子供への働きかけ、保護者対応、学校・教室掲示、一斉指導、教師教育など、改めて自分たちの日常的に行っていることの大切さを再確認することができた。

【De Wellant college Oegsteest】

オランダの職業訓練学校

三澤 貴博・小倉 信（帝京大学大学院教職研究科 高度実践化コース）

1 学校基本情報

学校名：De Wellant college Oegsteest

所在地：Lange Voort 70, 2341 KD Oegstgeest,

在籍数：約400人

学校の特徴：Wellantcollegeはvmboに属する職業訓練学校であるため、授業内容は生徒が社会に出て通用する力を育む内容が多い。

具体的には、農産物の加工・調理、花の芸術、造園、植物の育種・技術などの内容がある。

これらの実務的な内容とオランダ語や英語、数学といった基礎科目で教育課程が編成されている。

実務的な内容と基礎科目の割合は、初年度でクラス分けされたクラスにより割合が異なっている。

BB、KB、GLというクラスに分かれており、GLクラスになると実務的な内容の授業が多くなる。



図 学校内の多様な生物

表 授業時間

1 時限	1 時限 8：30～9：20
2 時限	9：20～10：10
中休み	10：10～10：30
3 時限	10：30～11：20
4 時限	11：20～12：10
昼休み	12：10～12：40
5 時限	12：40～13：30
6 時限	13：30～14：20
7 時限	14：20～15：10
8 時限	15：10～16：00

2 調査訪問の記録

(1) 授業風景

Wellant college では、2つの授業を観察した。

1つ目の授業は、問題集を解き進めていく授業であったため、日本の教育と差異を感じ取ることができなかった。

2つ目の授業は、メールを作成する授業であった。具体的には、ヒツジの出荷をするために送るメールの作成の仕方についてである。この授業は、職業訓練学校ならではの取り組みではないかと思う。

オランダの教育を視察するなかで、学校で学んだことが就職をした時に発揮されるように教育課程が組まれているのを感じた。

そのため、このメールを作成するという授業も生徒が社会に出て必要となる力を育むには、効果的な授業であったのではないかと感じた。

(2) ICT を活用した授業

生徒一人一人にタブレットが配布されており、授業中に使用している光景が見受けられた。

日本では、ICTなどの機器を使用する時は、授業開始後に生徒一人一人に配布しているが、Wellant collegeを初め、多くのオランダの学校ではBYODというシステムを取り入れている。BYODとは、

Bring Your Own Device の略で、生徒自身で所持しているスマートフォンやタブレット機器を学校内で活用できるというシステムである。

生徒が当たり前のように授業で ICT 機器を使用できる仕組みが整っていた。

(3) 学校の様々な施設

Wellant college には職業訓練学校ならではの施設が多数あった。

日本の学校で一般的にある教室と言え、家庭科室、理科室、技術室、美術室などがあるが、Wellant college では、そのような教室の他に、農業を学ぶための栽培室や造形を学ぶための教室、動物飼育室などがあった。

造形室には、レジなどが実際に置かれていたため、単に造花に対するスキルを身に付けるだけでなく接客という社会的なスキルも授業を通じて育まれていることが伺えた。

また動物飼育室には、ヘビやカメレオンなどの爬虫類からウサギやハムスターなどの哺乳類の動物が飼育されており、学校の敷地内には、ブタやヤギ、ヒツジ、ニワトリなどの動物が多種多様に飼育されていた。日本の理科室との違いを痛感したとともに、知識、技能の習得だけでなく、社会に通じる能力を育成していくためには、実物教材を用い、実際に手で触れ体験させることも必要ではないのかということも考えた。

施設の話とは少し話が逸れてしまうが、Wellant college に所属している理科の先生の姿勢に大いに感銘を受けた。この先生は集中力が持たない生徒を如何に集中させるかという研究主題を持ち、研究を行っていた。具体的には自転車のペダルのようなものを漕ぎ続けることにより集中力が増すのではないかという仮説の基、研究を進めている様子であった。授業や学校を運営していくなかで、研究を続け、学び続けるという姿勢も Wellant college の訪問から学び得たことの一つである。



図 生徒の集中力を高める工夫

3. Wellant college を訪問して

今回、オランダの Wellant college を訪問し、感じたことは、イエナプランやドルトンプランなどオランダの教育には独自の色があると勝手に期待をしていたため、Wellant college での授業観察や校長先生と対話をするとう日本の学校と変わらないような授業や先生の悩みを伺えた。

しかし、世界幸福度ランキングでオランダと日本を比較するとかなりの違いがある。社会福祉や制度の違いもあると思うが、学校での学びが社会に通じる力になっていることも一つの要因なのではないかと思う。

【Zonnebloemschool】

オランダの特別教育と特別学校

高田 裕一 (帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

1 オランダの特別教育制度

1998年、専門センター [the Expertise Centres] に関する法律が導入され、地域の特別学校・中等特別学校のコンソーシアムである地域専門センター [Regional Expertise Centres] (RECs) が設立された (2003年施行)。これらは以下の四つの群に分けられる。

- ・第一群：視覚障害
- ・第二群：聴覚障害またはコミュニケーション障害
- ・第三群：肢体不自由、知的障害、重複障害、慢性疾患
- ・第四群：行動障害、重度障害、慢性疾患 (精神科)、教育研究所にいる者

表 特別学校在学数

	就学者総数	特別学校在学数
ISCED02 (4～5歳)	351,600人	3,715人 (1.0%)
ISCED1 (6～12歳)	1,181,894人	26,025人 (2.2%)
ISCED2 (13～16歳)	811,724人	37,741人 (4.6%)
ISCED3 (17～18歳)	806,924人 * 1	N/A (-)

* 1: ISCED3は、HAVO、VWO、MBO、成人向けの中等・高等教育などを含み、年齢制限はない。

※ 割合は、「特別学校在籍数／就学者総数」で導き出し、小数第二位以下を切り捨てた。

※「European Agency for Special Needs and Inclusive Education」の「2016/2017年度」のデータから作成した。

特別学校在学数は表1の通りである。日本で特別支援教育を受けている幼児児童生徒数 (幼・小・中・高) は、「特別支援教育資料 (平成29年度)」 (文部科学省, 2018年) によると、特別支援学校

在学者は141,944人 (0.9%)、特別支援学級在籍者は235,487人 (1.6%)、通級による指導を受けている者は108,946人 (0.7%) である (合計486,377人 (3.2%))。日本に比べると、オランダでは特別学校に就学している割合が高くなっている。また、オランダには日本でいう特別支援学級は設置されておらず、特別な教育的ニーズ (SEN) のある幼児児童生徒が通常の学校に就学しているケースもある。

2 学校基本情報

学校名: Zonnebloemschool

(日本語で「ひまわり学園」)

所在地: 四つの校舎がある。

- ・Bloementuin 校 (SO) ※代表オフィス
Europalaan 148, 8303 GM Emmeloord
- ・Plantage 校 (VSO)
Genèveplein 1, 8303 JZ Emmeloord
- ・Jumbo 分教室 (VSO)
Europalaan 33a, 8303 GH Emmeloord
- ・Esveld 校 (VSO)
Espelerweg 12-2, 8303 HX Emmeloord

校長名: Aart Reussing

児童生徒数: 216人 (22クラス)

教職員数: 85人 (フルタイムとパートタイム合計)

対象: 精神障害、学習障害、IQ65まで、行動障害 (自閉症、ダウン症)

方針: キリスト教に基づいた特別教育

学校の特徴: エクセレントスクール [Excellente School] に指定されている。



3 各校の詳細情報

(1) Bloementuin 校

4～12歳の幼児児童が対象で、8クラスある。5クラスが一般学級で、3クラスが特別学級[specifieke groepen]（日本の特別支援学校の重複障害学級に相当する）である。幼児児童は全員、週2回自校またはPlantage校で体育の授業を受ける。また、水泳や「Rots en Water」（教育用に開発された心身トレーニング）も受ける。日本の特別支援学校幼稚部及び小学部に相当する。

(2) Plantage 校 並びに Jumbo 分教室

12～20歳の生徒が対象で、9クラスある（Jumbo分教室を含む）。A～Dの四つのプロフィールで構成されており、さらに、12～14歳、14～16歳、16～20歳と、年齢によってもクラスは分類される。AとCの生徒は20歳までここに在籍し、Cは特別学級である。木材及び金属加工、調理、演劇、自転車技術、キャンドル作りなどの教室がある。日本の特別支援学校中学部及び高等部に相当すると思われる。

(3) Esveld 校

16歳以上の生徒が対象で、5クラスある。職業訓練センター[Leer Werk Centrum]とも呼ばれる。主体的な労働学習と実習[stage]が目的である。学校の倉庫や店での労働、庭園の整備、動物の世話、料理など、実際の科目[praktijkvakken]が数多く提供される。東京都立特別支援学校高等部の就業技術科並びに職能開発科に相当する。

4 特色ある教育活動

(1) 実践的探究 [Praktijkverkenning]

Plantage校では、実習を通して、生徒の将来のためのオリエンテーションと準備を行う。12～14歳の全ての生徒がまず「実践的探究」を開始する。教職員の指導の下、4～5人の生徒からなるグループで実習を行う。生徒はキャンドルを作ったり、パイやケーキ、クッキーを焼いたりする。また、庭や温室、学校内外での作業を行う。年間で8週間を4

回行い、生徒のグループは交代する。

(2) 監督付き実習 [Begeleide stage]

「実践的探究」の次に「監督付き実習」を開始する。実習先は、北東ポルダー（Zonnebloemschoolの所在地域）の農場や牧場、ホテル、スーパーマーケットなどである。「実践的探究」と同様、「監督付き実習」も教職員の指導の下、小グループで実習に行く。実習コーディネーターが実習先を訪問し、生徒がどのように仕事をしているかを確認する。これは、後の「個人実習」の実習先を視野に入れたものである。

(3) 個人実習 [Individuele stage]

生徒たちは16歳になると「個人実習」に行く。一人で参加し、実習先のスタッフによって指導される。「実践的探究」と「監督付き実習」での生徒の経験に基づいて、「個人実習」が生徒に適しているかを評価する。実習先と生徒が実習期間中に遵守しなければならないことの契約が実習コーディネーターによって作成される。最終的に、「個人実習」によって、生徒がZonnebloemschoolで働くことができるようになる。

5 訪問調査の記録

(1) 学校説明

Esveld校を訪問した。初めに、プレゼンテーションソフトや映像を交えて、Aart Reussing校長並びにMaaïke Kieft教頭から学校説明があった。どのような児童生徒がいるか、どのような学習をしているかなどについて説明があり、そこには「才能を信じる、何かできることがある」、「いろいろなことを経験させて、興味をもたせ、一つでもできることを磨く」、「自立できるように、社会に出られるように」といった内容が繰り返し出てきた。これらの言葉にZonnebloemschoolのフィロソフィーを感じ取ることができた。「何ができるか16歳までに分かるようになる」と良い」との言葉もあった。また、エクセレントスクールの指定についても説明があり、教職員がよく相談し合い、それぞれのスペシャリストもいて、シェアすることで教育の質の向上が図られた

ことが紹介された。説明の最後に、各自のプロファイルを作成し発達をよく観察すること、マニュアルはあるが目標に向かって発達に合わせて調整すること、うまくいかないことがあっても児童生徒のせいではなく教職員に何ができるか考えることの大切さを述べられた。

(2) 学習の様子

Esveld 校の実際の科目を参観した。屋外では、鉢植えの栽培、薪運び、芝刈り、ウサギの飼育など、屋内では、ダイレクトメール作り、調理室の使い方、木工などが行われていた。各作業2～4人で、それぞれに一人の教員が指導に当たっていた。いずれの生徒も作業内容を分かって、生き生きと自発的に活動していた。自身がこれまでに経験した特別支援学校や特別支援学級と比すると、活動が生徒に任されているように感じた。



図 薪運び

(3) ポートフォリオ

学習の参観後、ポートフォリオを拝見させていただいた。仕事に対する意識を聞き取ったものや仕事の能力や姿勢などをチャートにしたものなど、幾つかの様式に生徒の様子が細かく記録されていた。これらは担任、実習コーディネーター、生徒の三者で作成され、生徒本人が好きなことや得意なことをはっきりさせていくことが大事であるという。12歳から20歳まで作り足していくこのポートフォリオは「証」とであると、Aart Reussing 校長は締めくくった。

【Het Waterland, Leiden】

職業教育中心の特別支援学校

南部 有枝（帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース）

1 学校基本情報

学校名：Het Waterland

概要：軽度の発達障害などを含め、VMBO に入っていない 12 歳から 18 歳までの生徒を対象とした学校で、職業教育を中心に行っている。最終的に MBO に進学する生徒もいる。

授業時間：AM8：30～PM2：30。個々のコーチングは、PM2：30～PM3：15。各生徒は週に平均 34 レッスンを受けることができる。

2 Het Waterland について

(1) 学校の特徴

実践的な教育に力を入れており、学年に応じていくつかの種類の実習や、インターンシップが用意されている。1、2 年生は学校の中で実施し、3 年生からは工場などを見学に行く。4 年生、5 年生はインターンシップとして工場などに働きに行く。

また、この学校では、教師のことを「コーチ」と呼ぶ。これは、「教える」という上からの立ち位置を権威づけないようにするためであり、「コーチ」には、最後まで一緒に学んでいくという意味が込められている。「coaching」と「teaching」について、私は深く考えたことがなかったので、いい機会となった。「コーチ」と「教師」という言葉に替えると、「コーチ」は私の中で、「厳しそう」、「運動部にいそう」というイメージがあり、授業の中にいるイメージではなかったのである。

(2) 学校のビジョン

・客観的な視点を持った教育

実習では、VMBO レベルの教育に参加できない 12 歳から 18 歳の生徒に教育を提供している。目標は、「学生が自分の才能を発見できるようにし、仕事や学習を開始できるように最適に開発すること。」自立して、社会生活に自分のレベルで参加できるよ

うにすることである。そして、独立した生活、仕事、余暇活動のために準備されている。これはもちろん生徒の可能性を想定している。

・知識があるということ

生徒が、教育的および教訓的で、行動の明確なビジョンを持つ、専門家の大人に会う学校である。お互いを尊重し、個人差を是正する学校としている。生徒に現実的な自己イメージを発達させ、イニシアチブをとることを敢えて望んでいる。

・関与するということ

生徒の資質と可能性に前向きな姿勢を持つ学校であるために、関係者全員との良好でオープンなコミュニケーションを必要としている。コーチは、すべての生徒が、社会で可能な限り自立して生きていくことができるようにすることを目的としたケアを行っている。

年に 2、3 回、保護者の方とコーチとでミーティングがある。大体は 10 月、2 月、6 月にあり、ミーティングの一週間前に、保護者に電話や手紙でアポイントメントをとる。やったこと、できること、問題などを話し、今後のプランをたてていく。3 か月後にチェックをし、何ができていて、何が足りないのか、どうしていけばいいのか決めて実行する。



図 1 施設入り口付近のロビーの様な空間

(3) 施設の様子

設立してから10年目で、外観も内部も新しい印象を受ける。

また、コーチたちがミーティングで使う部屋には給茶器やソファが用意されており、リラックスしながら会議などが出来るようだ。

(4) 生徒の様子

Het Waterland で学ぶ生徒たちのIQは60～80である。本を読むことや、勉強が嫌いで、なかなかじっとしてられない生徒もいるという。

また、1、2年生は基本的には12歳から13歳だが、中には落第を何度かしたために、15歳や、15歳以上の子もいる。

内部インターンシップでは、学校内にある喫茶店を模した部屋で調理や店員などの実習体験を行える。また、オランダの学校らしく、船や自転車を作る実習場が用意されている。学校内にも展示されていた。



図2 展示物

(5) コーチたちの様子

生徒たちに対し、コーチは、100回以上も同じことを繰り返し教えていかななくてはならない。そのため、忍耐力が必要になる。なかなかそういったことに合わないコーチには違う学校を勧めることもあるという。何か問題が生じた際にはクラスのコーチが指導するが、クラスのコーチで解決できなければ、上位のコーチ（主任的な役割と思われる）のところに

に話がる。

卒業時、生徒に何らかの資格は与えられないが、その代わり、一年時からポートフォリオを作成しており、卒業時に生徒に渡すことになっている。ポートフォリオには在学中に学んできたことや、できるようになったことなどが記載されている。そのポートフォリオを就職希望の職場の上司に見せ、採用を判断してもらう。中には、16歳になるころに、数学など得意なものがあつた場合、資格がもらえる学校に行かせることができ、そういった子が年間で15人程いるという。コーチはそういった子達のみとりを行っている。

仕事に就いてから、一日目に感情がコントロールできなくなってしまった生徒もいた。その生徒は、怒りがコントロールできないことがあつたのだが、再びHet Waterlandを訪れ、コーチに相談することで、3、4か月後に安定して働けるようになったという。

また、コーチと生徒の関係作りだけでなく、コーチ同士の良好な関係作りをするために、こころがけていることは、「人をよく見る」ということだという。コミュニケーションが大事で、褒め合うことで、「今日いい仕事をしたな」と思ってもらい、いい気分带回家に帰らせること、それが上位のコーチの仕事だという。コーチのコーチのような役割を上位の二人が担っている。そして、「飲みに行くこと」もまた、良好なコーチ関係を築く上で大事だという。金曜日に、一緒に夕飯に行くことが多いとのことであった。

【Universiteit Leiden ICLON】

オランダの教師教育

宇佐美 健（帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース）

1 学校基本情報

学校名：Universiteit Leiden

所在地：Kolffpad 1 P.O.Box 905 2300 AX Leiden

講師名：Daan Romein

(Team Leader Professional Development)

学校の特色：1575年に設立されたオランダ最古の国立大学で、ヨーロッパを代表する国際的な研究大学の1つである。世界的な雑誌の大学年間ランキングでは、25,000の大学のうち世界の上位100の大学で高いスコアを獲得している。学部は、芸術、人文科学、自然科学などの7つが設置されており、45の学士号プログラム、ハーグで7つの学士号プログラムを提供している。モットーは「自由の砦」である「プレシディウムリベルタティス」であり、小規模の教室、多様な文化との接触、革新的な教育方法の3つが大学の特徴として挙げられる。(Web Siteより)

学生数：約 30,000 名 教職員数：約 6,700 名

2 訪問の記録

Daan氏との90分間は、①Daan氏によるオランダの教育制度についての概説、②我々が事前に送っていた質問に対するDaan氏からの回答、③Daan氏があらかじめ用意していたワークショップ、3つのコンテンツで進められた。以下、それぞれの内容を記していきたい。

(1) オランダの教育制度

オランダの子供は、4歳になった翌月から小学校に通いはじめる。そこから12歳になるまでの8年間を小学校で過ごすことになる。オランダの憲法23条では、「教育の自由」が定められており、何をどのように教えるのかが学校に委ねられている。公立の学校に限らず、宗教立やその他の私立に対しても、同等の資金援助が行われている。生徒からすると、公立を選択しようが、私立を選択しようが、経済的負担に大きな違いはうまれない。そのため、保護者は子供を学校に入学させるとき、自治体から配

布される、公立も私立も含んだ近隣の小学校のリストから、自分の意志で学校を選択する。しかし、リストや学校見学からだけではどのような学校かが判断しにくい場合がある。そこで保護者は、学校のホームページに公開されているインスペクターによる監査結果を参考にする。教育の自由が認められているオランダでは、定期的に文部科学省から独立した組織である教育監督局が、学校の監査を行う。学校には、その結果を公開する義務がある。保護者が、客観的な情報を手に入れることができる制度を整えているのだ。このような、学校選択の自由とそれを支える制度は、オランダの教育制度の大きな特徴である。

オランダは、小学校から皆同じように中学校へ進学する単線型の日本とは異なり、初等教育を終えると、3つの異なる中等教育のコースが用意されている。1つ目はVWOといい、大学(WO)への準備のための6年間のコースである。2つ目はHAVOといい、高等職業専門学校(HBO)への準備のための5年間のコースである。高等職業専門学校でも、WOのように高度な技術や知識を必要とすることに変わりはないが、具体的な職業を想定した訓練を行う点に差異がある。そして、3つ目はVMBOといい、主に中等職業訓練学校(MBO)への準備のための4年間のコースである。VMBOの中にも異なるレベルがあり、より理論的な教育から、より実践教育を重視するものまである。修了後、MBOへ進学せずに、そのまま就職する場合もある。

オランダの子供達は、8年間の初等教育を終えるときに、全国共通の試験を受ける。そして、その結果と学校での学習状況を踏まえ、教師と保護者、子供本人とで、中等教育への道を選択するのだ。なお、全国共通の試験は入試とは異なるため、3つのどのコースを選択するかは、自らの意志による。

Daan氏によれば、進路選択の際、全国共通の試験の結果も考慮されるが、担任の助言が大きな影響

力をもつという。また、コース決定後も、他のコースへの移行の仕組みも残されていたり、1つの学校で2つのコースを用意していた「ブリッジクラス」を設けていたり、コース間の移動が柔軟にできる点も大きな特徴であると説明されていた。

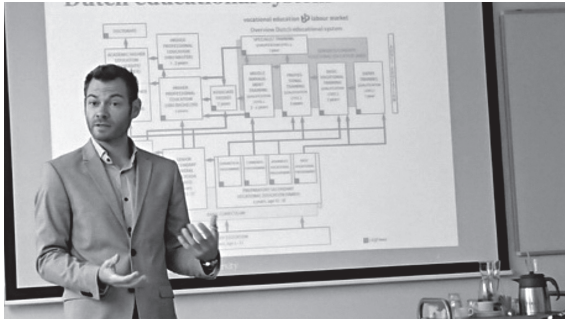


図 オランダの教育制度を解説する Daan 氏

(2) 質疑応答

あらかじめ、こちらからメールで送信していた3つの質問について、Daan氏から回答を頂いた。

〈質問① 教育の自由があるオランダの教員を養成するにあたり、大切にしているものは何か。〉

オランダには、公立の学校以外にも、オルタナティブ教育をベースとしている学校や宗教色の強い学校がある。それぞれで教育理念は異なるため、どれかに特化した教員養成はできないということだった。学生の参考となるように、様々な種類の教員にゲストティーチャーとして講演をしてもらうことはあるが、最終的にはどういった教育をしていきたいのかを自分で選択できるように育てているようだ。

〈質問② 現職教員の大学院への長期派遣制度はオランダにもあるか。どのように考えるか。〉

オランダにも現職教員が大学で学ぶ機会があるとのことだった。その効果について、Daan氏は「今、派遣されているあなたが一番感じているのではないか」と逆に私に問われた。私は、「自分の実践を見つめ直すことにつながり、視野が広がる」と答えた。Daan氏にも、賛成していただけた。

〈質問③ オランダの教師の労働環境や、教員のチームワークについて、課題はあるか。〉

教師の特性として、「生徒のため」という意識でいくらでも時間をかけてしまいがちな仕事であると

指摘されていた。また、教員の人気下がっていて、教員を志望する人が減少している問題があるという。少なからず日本が抱えている問題と似た問題があることがわかった。チームワークに関しては、上司と部下といった認識があまりなく、誰もがみな平等な関係で考えを伝え合うことができるという。

(3) ワークショップ (我々がオランダから学べること、オランダが我々から学べること)

①我々がオランダから学べること、②オランダが我々から学べることなど、主に2点をテーマでワークショップを進めた。

①では、教員に対する生徒の数が日本よりも少なく (最高でも20名程度)、生徒一人ひとりの学習の状況をよく見取ることができる仕組みとなっていることがあげられた。また、教室や校舎の内装や構造が、開放的で生活の場としての雰囲気が大切にされているとの指摘も出た。タッチパネル式のテレビがすべての教室に配備されるなど、ICT化の話も話題となった。

②では、日本の中学校の学区を基盤とした小学校と中学校の連携した研究活動など、学校外の教員との交流の文化があがった。オランダの学校では、学校内で研修や研究が行われているが、学校をこえての研究活動は一般的ではないらしい。また、日本では小学校と中学校の免許取得にも、大学卒業は必要な要件であるが、オランダではWOの卒業が求められるのは高等教育の教師のみであり、初等中等教育の教師はHBO (高等職業訓練学校) 点も違いとして見えてきた。

3 訪問を終えて

ワークショップは、日本の教育の強みを考えるきっかけとなった。それまで、強みよりも課題にばかり目を向けていたことに気づかされた。日本の教育の強みは、授業実践研究の質的な深さにあると感じた。一方、オランダの教育の強みは、一貫した考えで構築された教育制度などの枠組みであると感じた。オランダのような一貫した枠組みに、日本の教育の質的な高さが掛け合わされたとき、教育は大きく発展するかもしれないと感じた。

海外学校教育実地研究を終えて

“have to ～”ではなく“need to ～”の教育

小松 千草

オランダの学校を訪れた時、まず感じたことは、教員の様子や児童・生徒の様子、学校の雰囲気、「余裕」があることだった。児童・生徒の人数が少ないことや、校舎のつくりやインテリアといった空間的な面での余裕もあったが、一人一人の表情や振る舞い、休憩時間の過ごし方など、精神的な面や時間的な面からもそう感じた。

オランダで大事にされていたことは、「自律」。ある学校の校長先生が、『学力をつけさせることはもちろん必要だが、社会に出ていく「自信」をもたせることが大切だ。』と、話していた。根本にそういう思いがあるからこそ、学校では、自分がどうしたいのかを児童自身が考え、決めて、失敗をすることも含めて、活動に取り組めるようにしているのだろうと思った。オランダの教師は、一人一人を信頼し、大きく構えて見守っているように見えた。教師の、教育に対する熱心さはオランダも日本も変わらないと思ったが、“have to ～”と“need to ～”、そのアプローチの仕方には大きな違いがあると感じた。

オランダを訪れて、私自身の見方、考え方に偏りがあることにも気づくことができた。「課題」ばかりに目をむけてしまう癖だ。「オランダの教育は素晴らしく、日本の教育には課題が多い。」、どこかそんな偏った見方をしていたように思う。よりよいものを求めて学んでいく姿勢は大事にしたい、でも、足りないものにばかり目を向けていると、自信をもつことはできない。オランダの教育について、少しだけだが学ぶことができたからこそ、日本の教育の今ある強みについても見えてきた。日本の教育が今まで培ってきたものや、自分達の学校の実践を互いに認め合いながら、教員一人一人が自分の教育に自信をもてるようになりたいと思った。

日本とは違う教育制度、価値観、社会をもつオランダで、教育の現場を少しでも見ることができたことは、自分自身を見直す、よいきっかけとなったと思う。

オランダ学校訪問から考えること

小宮山 香織

オランダの学校は、オランダという国、社会、価値観の中での教育が行われている。オランダで素晴らしいと感じたものが、日本にそのまま適用することができないことも実感した。また、オランダと比べることで日本の教育の強みも感じることもできたことが良い経験となった。

一番印象に残っているのは、「どんな職業もそれを担う人が必要」という言葉である。オランダでは、12歳で試験が行われ、その後の進路がある程度決められる。大学に進学できる中学校に進学できなかった場合、落ち込む子もいるのではないかと考えたが、オランダではあまりそのような価値観で捉えていないようであった。むしろ自分に合った道に進むという考えが一般的であり、勉強が得意な子はその道で力を発揮し社会に貢献する。そうでない子は自分の得意なことを生かして社会に貢献するという考えがあるようだった。心からそのように思えるような社会、価値観の中であればオランダのシステムは効率的で多くの人が幸せに感じるシステムだと思う。しかし、日本ではまだ「勉強ができる方がよい」というような価値観が一般的にあると思う。だから、教師は、学級みんなの学力を保証しようと努力する。オランダに比べて1学級の人数が多い中で、それを達成しているのは、日本の教育の強みなのではないかとも感じた。

オランダに行くまでは、「オランダの教育は素晴らしい」という思いが強かったが、実際に行ってみることで、日本の良さも感じられた。どちらの良さもそれぞれの国の価値観の中で良いとされていることであり、どちらが良いとは一概に言えないものであると感じた。ただ、オランダで感じた周りとは比べず個性や個の成長を大切にする姿勢は、私がこれまで以上に大切にしていきたいと感じたことである。そして、どのようにその思いを具現化するかを考えていきたい。そのヒントとしてオランダの先生の姿から学んだことは、専門家としての誇りと心の余裕である。専門家であることと、心の余裕は繋がりがあつたもののようにも思えるので、専門家としての専門性を磨く努力をしていきたい。

感想

友部 智予

オランダ研修に参加した目的として、「自分自身の授業の課題解決の参考にすること」、「現在の日本の教育課題の解決について参考にすること」以上の2点である。全ての小学校が無償であり、教育方針に関しては各学校が自由に決定できるなど、日本とは大きく異なるオランダ教育から、自身の教育に適用できる部分を探そうと考えていた。しかし、今回のオランダ教育を見学したことにより、様々な教育方法を知るだけでなく、オランダの教育に関する課題を見ることができた。主に「制度として12歳で凡その自分自身の進路を決定しなければならないこと」、「教員の仕事が多様化し、負担が大きくなっていること」の2点である。これらの課題は日本でも同様の課題が見られる。また移民や戦争のPTSDを抱えた子供たちへの支援など、ヨーロッパ州特有の課題も知ることができた。また一斉授業の形式に関しては、日本の教師の教材研究力や教材開発の創意工夫の独自性、授業中の生徒の観察能力の高さを再認識することができた。以上のように日本と同様に多くの課題がある中で、オランダ教育の強みは綿密なコミュニケーションにあるのではないかと考えている。これらの複雑な課題に対してオランダの現場の教師は、一人一人が明確な教育観を持ち、それらを綿密なコミュニケーションにより周りの人々と共有していることで解決し、乗り越えているのである。学校の課題に対して教員のみで対処するのではなく、保護者や地域と話し合い協力し合うことで、皆が納得する解決策を探り実践している。

授業形態などをそのまま日本の教育に当てはめるとは困難である。しかし、生徒含め学校に関係する人間全てが心身ともにリラックスしながらコミュニケーションを取り、互いに個性を尊重し合う環境づくりを心がける姿勢はすぐに取り入れることができる。またこのような環境づくりは、今後日本においてチーム学校を実現していくためにも必要不可欠なものであると感じた。

実際に見て、触れて、感じることからの学び

安藤 拓也

「良さを感じる」をキーワードに私はオランダへの実習へ出発した。オランダの教育。「教育の自由」ととても魅力的な響きだった。いくつものプランを実践できる国。いったいどんな環境でどんな子供たちが育っているのだろうか。たくさんの「知りたい」が自分の中で生まれてきた。そして、実際にオランダへ行くにあたりオランダの教育について知ると共に、その良さを感じてくることを目標とした。

目の当たりにしたオランダの教育の中には私の「知りたい」を解決ししてくれることが数多くあった。自立に向けての自己決定の力を育てるための系統だった計画、特別な支援を要する子供たちへの様々な手立て、保護者との連携など自分の指導に取り入れたいと感じられるオランダの教育独自の良さを感じることができた。

しかし、しばらくオランダの教育の良さを目の当たりにしているとふと、これは日本でもやっている。ここは日本の方が優れているかもしれないぞという考えも生まれてきた。システム的にはオランダの教育には多様性や幅における良さがある。一方、日本には授業1コマのプランニングや導入、児童を引き付ける教材の工夫などの良さがあることに気付かされた。オランダの「良さを感じる」ことを目標としていたが、いつの間にか日本の良さも感じることもできていた。たくさんの共通点も見つけられた。教師の願い、悩み、職場の環境、教師教育において日本もオランダも多くの同じ思いがあることにとても勇気が湧いた。

今回はオランダの中でも特徴のある7つの学校を訪問した。もちろんそれだけでオランダの教育を語ることはできない。また、日本における教育についてもまだまだ知らないことだらけである。しかし、今回実際にオランダへ行き実際に見て、触れて、感じることを通して予想をはるかに超える気付きがあった。多くの気付きが自分の教師としての在り方を考えるきっかけを作ってくれた。オランダ教育の良さ、日本の教育の良さを自分の良さへとつなげられるようにこれからも積極的に学びを深めていきたい。

オランダを訪問して

三澤 貴博

海外研修でオランダを訪問して、正直な感想として、オランダの教育を日本に取り入れることは難しいと思う。これまでのオランダ歩んできた教育の歴史や文化などを踏まえ今の教育制度が成り立っているため、イエナプランやモンテッソーリの教育を日本の公立校で行うことがあれば、大きな混乱を招く事態に陥ってしまてであろう。それほど、オランダの教育制度は真似できるほどのものではないということである。

では、なにも考えずに私はオランダで過ごしていたのかといわれれば、そうでもない。

今回の海外研修を通じて特に感じたことが、オランダの教育という題材のもと、現職の先生方や同期のストマスと学び合い、自分の考えを深めるための深めた方を学ぶ機会、教員としての教師観について考える機会であったのか振り返ることができる。学校を訪問した際にでてきた疑問を引率の教授方、現職の先生方と話しあい、自分になかった視点を入れてもらい、更に自分の考えを深める。そして、リフレクションを行い、他者の疑問や気づきを共有することにより、自分になかった視点が更に生まれる。この一連のプロセスによって、他の疑問が生じたとき、考えの幅が広まった状態から物事を捉えることができるようになると思った。

オランダの学校を訪問すると「なぜ、このような取り組みをしているのだろうか」や「なんのために、この取り組みが行われているのだろうか」という疑問が生じる機会が多々あった。このような思考の過程を経た結果として、日本に戻って、授業をつくる際に、なんのためにこの授業の行うのか。この活動は生徒のどんな能力を育むために行うのかということを考えるようになった。

上手く言葉をまとめることはできなかった、海外研修で共に学んでくれた教授、現職、同期のストマスに感謝をしたいと思います。

オランダ報告

小倉 信

私が帝京大学大学院(教職大学院)に入学するきっかけとなったものの1つに海外実地研究に参加し、海外の教育施設を見てみたいというものがありました。今回はそのような経緯もあり、参加前より非常に大きな興味・関心を抱いていました。オランダは憲法によって教育の自由が保証され、様々な教育メソッドが取り入れられ、実践されていることから、オランダの学校は、日本とどのような違いがあるのだろうか？日本に取り入れられるものはどのようなものがあるのだろうか？など自分なりにいくつかの視点を持ちながら学校施設の視察を行いました。

オランダへ渡航する前に海外の教育に関する書籍を読んだり、調べたりしたが、いざ現地に行ってみると想像をはるかに超えた世界があったり、オランダで抱えている教育課題が日本の教育課題と類似しているなど今回の視察を通して日本にいては決して経験することができない、とても貴重な経験を通じ非常にたくさんの学びがあったと考える。毎晩、実地研究に参加したメンバーと共にリフレクションを行えたことも非常に有意義な時間であった。自分では気づくことのできなかった視点や自分が思い、感じたことを対話を通じて共有することで自身の学びが深い学びへと繋がったのではないかと考える。今回の視察を通して学ばせていただいた貴重な経験をこれからの教職人生に活かしていきたいです。

対話を通して

高田 裕一

ある特別学校で生徒の作業学習を参観していたとき、違和感を抱いた。確かに教師は生徒のそばにいたが、指示を出したり支援したりしていなかった。よく言えば見守っていた、生徒を信頼して任せていたと言えるが、これは「指導」していないのではないかと感じた。用具の扱い方、手順や安全の確認など、指導できることはたくさんあるはずであった。

自身は特別支援学校や特別支援学級での教員経験が長く、特別支援教育の現場における適正な「指導」の在り方に強い思いがあった。その夜の宿舎でのリフレクションにおいて、この怒りにも似た違和感を告白した。それに対して、次のような見解と正対した。「子供を『育てる』のではなく、子供は『育つ』のではないか。」と。

オランダの学校を日本の学校教育の視点（自分の価値観とも言える）で無意識に見ており、とすると批判的な感想を抱いた。このときのリフレクションを通して、いかに自分の価値観だけで見ていたかに気付かされた。この気付きは、オランダの学校を訪問したから得られたのではなく、仲間と共有した体験を基に「対話」を通して得られたものであった。この経験以来、帰国後も教職大学院の授業の中で自分の価値観が無意識にこびり付いていることにふと気付く機会が増え、「対話」を通してそれを乗り越える（自分の価値観にとらわれず、ありのままを見る）面白さが芽生えた。

海外に一定期間行ったことで、他国の学校教育を知ることによって没頭できる機会を得られたと同時に、没頭できたからこそ気付きがあったとも言える。かけがえのない経験ができた。

オランダの感想

南部 有枝

学校訪問時の最後、質問の時間に「社会に出ていったときに、どんな力が必要だとお考えですか」と尋ねた。「難しい質問ですね」とコーチはおっしゃったので、思わず笑ってしまった。「そうなんです。でも私は、いつもそれを考えています」と伝えた。

少ししてから、「社会にあった行動をするべき、でしょうね」と答えてくれた。具体的には、「仕事に適応していること」、「時間を守ること」、「一つの仕事を全うするために、柔軟性があり、優しい、いいひとであること」であった。「約束を守ること」も重要であると話してくれた。そして、「そのための訓練をしている」ともおっしゃっていた。その目的意識というものをしっかりとコーチ側が共有しているから、一体感というか、アットホームながらも、教育の場として確立しているのかもしれないと考えた。

保護者の方とのオープンで親しげな関係も素敵な事だと思った。この時に私は、自分自身が、日本の特別支援学級の事は見えているが、日本の特別支援学校のことは分かっていないと感じた。さらに言えば、日本の教育そのものを分かりやすいように言語化できないことに気づいた。

また、オランダの学校では落第してしまう生徒がいることを別段恥ずかしい事とは捉えていないようで、日本の認識と異なることを実感させられた。

今回、私は初めての海外経験だったためか、英語を話すことの重要性を身をもって知ることとなった。自転車を利用する人が多いことなどの文化の違いなど、見るもの全てが刺激となった。生徒を思う気持ちはどの国でも変わらないものなのだと実感できたことはとても良かった。また、オランダの教育の場を見て、自由・自立・尊重について考える契機となった。真の自由とはどういうことなのか、自立とはどう育成されていくものなのか、人の性や移民など、尊重し合うことの困難などを、オランダを知る前とは違う視点で見ようとしている。海外の学校を知って、自分自身の視野を広げることができた。

実地研究の難しさ

宇佐美 健

事前学習で、オランダの教育について学んでいく中で、「教育の自由」という理念に感銘を受けた。特に、イエナプラン教育は日本でも注目されはじめ、実際にイエナプランの学校が開校されている。異学年集団やサークル対話など、その柔軟な考え方や手法を学ぶ機会にしたいと意気込んでいた。つまり、オランダの光景を直接目にする事で、自分の教育観がひっくり返るような経験を期待していた。

しかし、実際に学校を見てみると、期待していたオランダの教育の強みと同時に、オランダの抱える現実的な課題にも気付かされた。一つの理念や手法を無批判に盲信するだけでは、解決にはならないと感ずることができた貴重な経験だった。

ただ、そもそも、自分が感じた「強み」や「現実的な課題」といったものは、本当に正しい捉え方なのだろうか。私は教師と生徒がどのようなオランダ語のやりとりをしているのか、教材にはどのような問いが設けられているのか、そういったことを理解できてはいない。教室の環境や教師と生徒の雰囲気などから感じたことを頼りにしていくしかなかった。訪問した時間もわずか3時間である。その3時間の中でどれだけのものが見えたのだろうか。見えていないものの方が、はるかに大きいはずである。さらに言えば、その日だから見えていただけなのではないか。別の日に訪問していたら、きっと別の姿が見えていたかもしれない。その場で私が見えていないものもあれば、そもそも、その日には見えなかったものもあったはずだ。

自分の見てきたもの、現場の人から得た情報、自分がその状況に身をおいて感じたものなどをもとに、それらを慎重に扱いながら、一つの像をつくり上げていく。実地研究というものは、それだけ奥の深いものなのだ。何かを見て判断する時には、見えていないものがあるという謙虚さを忘れてはならない。それは、研究に限らず、我々が日々、現場で生徒や保護者、同僚に対峙している時にもあてはまるのではないか。この気づきを忘れずにいたい。